

月刊

2013

3
月号

みんぱく

特集
特別展

マダガスカル

霧の森林のくらし

みたことのある異郷 飯田卓／何処にでもある何処にもない世界 深澤秀夫
霧の森とは 吉田彰／マレーシアの森の人とマダガスカルの人 内堀基光
アントエチャ村での上映会 川瀬慈



世界の音楽業界を牛耳っているのは、ユダヤ系のマネージメント企業である。ある国が将来有望なマーケットと見なすと、彼らはその国の若者から才能ある者を見出し、育て上げる。そして彼らを新時代のクラシック界を担う象徴として世界的に売り出し、その若者たちの母国から、アルバムやコンサート売り上げを手にするのだ。

日本もかつて有望な市場と見なされた時代があった。それはすなわち一九六〇年代から七〇年代へかけての高度経済成長期と重なる。その時期のスターが指揮者の小澤征爾氏であり、ピアニストの内田光子さんであった。その後は、ヴァイオリニストの諏訪内晶子さんや五嶋みどりさん、五嶋龍さんのご姉弟が続く。まずその国のスターをつくり、のちにそのファンを獲得するのが彼らのやりかたなのだ。

その彼らが以前から注目しているのが、中国なのである。かの国出身のピアニスト、ラン・ランやユンディ・リなどは、いまや押しも押されぬ売れっ子だ。彼らは確かに才能に恵まれているが、そういった将来へ向けての戦略のために見出されたのであろう。

そういった流れをみてきた私の持論は、いまに世界の名だたるコンクールを制するのは、ほとんど中国人が韓国人になってしまっただろう、ということだ。世界でいちばんクラシックのC

プロフィール
1942年生まれ。作曲家、東京音楽大学教授。東京芸術大学大学院修了。代表作にオペラ「忠臣蔵」、NHK大河ドラマ「太平記」「花の乱」。2004年、ブッチェーニのオペラ「蝶々夫人」を下敷きにしたオペラ「Jr.バタフライ」を初演。2007年、紫綬褒章受章。2008年、モノオペラ「悲嘆」、ピアノ協奏曲「イカの哲学」を初演、日本人初となるブッチェーニ国際賞を受賞。2010年、オペラ「忠臣蔵」外伝、男声合唱曲「最後の手紙—The Last Message」を初演。2011年、渡辺晋賞を受賞。2013年、新作オペラ「KAMIKAZE—神風—」を世界初演した。



西洋音楽が 西洋のものではなくなる時代

三枝 成彰

Dが売れるのは、いまだに日本である。しかし、それも頭打ちとなった現在、次に売れるのはどこか？ 中国を考えるのはごく自然なことである。

ロリン・マゼールのようなクラスの指揮者ともなれば、一晚のギララが五〇〇万円とも言われる。年に一〇〇日コンサートがあるとして、五億の年収だ。一見多いと思うが、最高峰でその金額ならば、投資顧問のファンドマネージャーのほうが、優秀ならば若くてもそれよりずっと多い成功報酬を得ることができるといえる。

かつて貧困層出身や外国からの亡命者が、社会的な地位と名声を得る手段として音楽やスポーツを選び、懸命にそれに打ち込んで成功した時代があった。しかしいまは違う。市場の低成長と自らの努力とを差し引きしたとき、見合つものではなくなつたのだ。

アメリカのFRB（連邦準備銀行）の元総裁グリーンズパン氏は、じつはジュリアード音楽院出身のクラリネット奏者であるが、音楽市場が将来伸びないことを予測してか、途中でニューヨーク大に学び、経営コンサルタントの道歩んだ。氏のように欧米では音楽の道での将来に見切りをつけて他業界へ鞍替えする若者が増えている。西洋音楽の担い手と買い手が西洋人である時代が、すぐそこまで来ているのである。

月刊 みんぱく

3月号目次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
西洋音楽が西洋のものではなくなる時代
三枝 成彰</p> <p>2 特集
[特別展] マダガスカル 霧の森のくらし</p> <p>2 みたことのある異郷
——特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」のねらい
飯田 卓</p> <p>6 何処にでもある何処にもない世界 深澤 秀夫</p> <p>7 霧の森とは 吉田 彰</p> <p>8 マレーシアの森の人とマダガスカルの森の人
内堀 基光</p> <p>9 アントエチャ村での上映会 川瀬 慈</p> <p>10 研究フォーラム
アンダマン島民の現在——スマトラ島沖地震の6年後
池谷 和信</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
大草原の小さな博物館
——カザフスタンにおける博物館活動と教育活動をつなぐ試み
藤本 透子</p> <p>16 追悼
中村俊竜 民博名誉教授を偲ぶ
近藤 雅樹
祖父江孝男 民博名誉教授を偲ぶ
中牧 弘允</p> <p>18 多文化をあきなう
お金のためだけでない、絆のなかで働くこと
奥谷 京子</p> <p>20 異聞逸聞
ネコを食う
森山 工</p> <p>21 みんぱく私の逸品
ザフィマニリの女性用帽子
上羽 陽子</p> <p>22 フィールドで考える
タンザニアのハニー・コレクター
八塚 春名</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|

特集

特別展

マダガスカル 霧の森林のくらし

会期
2013年
3月14日(木)―6月11日(火)

場所
国立民族学博物館
特別展示館

前略 読者の皆さま

冬芽の開くのが待ちどおしいころとなりました。みんなく春の特別展も、いよいよ開幕します。今回のテーマはふたつ。バオバブやキツネザルで知られるマダガスカルと、今年で条約採択一〇周年を迎えるユネスコ無形文化遺産についてです。

日本ではまだ遠いと思われるマダガスカルに、どこまで肉迫できるか？ 有形とはかぎらない技術や知識を、博物館で展示できるのか？ どちらもむずかしい課題です。しかし、わたしたちが長い議論のすえに出した答えが、もうすぐご覧いただけます。ぜひ一度、足を運んでお確かめください。

春とともにみんなくでお待ち申しあげます。

特別展 準備関係者一同
草々



みたことのある異郷

―特別展

「マダガスカル 霧の森林のくらし」のねらい

飯田卓 いひだ たく
民博 民族社会学研究部

小さな山里のくらしから

マダガスカルは、アフリカ大陸の東方にある島国である。小さく見えるが、面積は日本の国土の一・六倍。文化的には、アフリカや東南アジアなどさまざまな地域から影響を受けてきた、ユニークな場所である。今回の特別展は、そのマダガスカルの中央高地の片隅にある「霧の森」が舞台である。挿絵をご覧いただきたい。山の谷あいあの小さな村。今回の展示準備でデザイン総指揮をとる上まりこさんには、はるばる現地まで出向いて描いてもらった。彼女によると、この村は、幼いころにすごしたおじいさんおばあさんの村に似ているそうである。村の周りに広がる棚田と林、玩具を手づくりする子どもたち、村の物知り、収穫の喜び、そして大家族の支えあい。

自然の障壁に阻まれたくらしが理想とはいえない。しかし、一、二世代前の日本にありふれていたこうしたくらしは、よきにつけ悪しきにつけ、理想のくらしを考える拠りどころとなっていた。いま、気づいてみると、それを雰囲気たりとも知る日本人が少なくなっているのではないか。大阪万博の前年に生まれたわたし自身、社会性とともにある田舎ぐらしを嗅ぎとった最後の世代であると思う。

田舎ぐらしのよき悪さをひっくり返して体感する経験を失うことは、若い世代にとって大きな損失だろう。マダガスカルという異郷の、とても小さなくらしをとおして、それをあらためて想像することができないか。展示会のプランを煮つめるにつれて、そう思った思いは強くなっていった。

展示のなかでは、マダガスカルと過去の日本を直接に比較したりはしない。そんなことをすれば、



ザフィマニリの家でしばしば客に勧められる腰かけ。ザフィマニリの木彫りが有名になるにつれ、ユニークな幾何学模様がほどこされるようになった



村から村へと木材を運ぶのも、ザフィマニリのくらしで大切な仕事のひとつ(撮影・内堀基光)

対象を小さく絞ることには、一長一短がある。短所は、小さな地域のことながら一般的な問題や関心に結びつきにくいことだろう。しかしこれは、考えてみれば、文化人類学者がつねにとり組んでいる問題だ。文化人類学者は、ウルトラミクロな村の生活から、ウルトラマクロな人類史まで語ってしまう。今回の展示会は、とても文化人類学的といえる。

マダガスカルといえば熱帯を連想するかもしれないが、ザフィマニリが住むのは標高千メートルを越えた高地で、冷涼である。ここで、インド洋の蒸気が冷えて霧となり、たくさん樹木はぐくんでいる。この木を利用するかたちで発達した木彫りの技術と知識は、二〇〇三年にユネスコの注目を受け、三年後に無形文化遺産のひとつとなった。

強調したいのは、指定されたのが技術と知識であり、個々の木彫り作品でないということだ。また、日本の人間国宝のような個人でもなく、くらしのなかでうけ継がれた技術が指定対象である。これを展示するには、標本資料(作品)を並べても、個人の履歴を紹介しても、不十分である。村のくらしをそっくり展示することが、無形文化遺産そのものの紹介につながる。そこで展示会では、標本資料や動画資料、写真やデッサンを駆使して、村のようすを体感してもらうことをめざしている。

村のくらしをそっくり展示、これまた難題である。展示のできればえ、ぜひとも観覧者のご判断をおきたい。

マダガスカルの山里が現代の動きから残り残されているように誤解されるだろう。じつさいのところ、この山里は、細々とした車道をとおして世界につながっていて、国際レベルの文化行政や観光ビジネスの影響をもろに受けている。このため展示会では、山里のくらしを、あくまで同時代のものととらえている。

マダガスカルの山里は不便である。しかし、それゆえにこそ、くらしを豊かにしていく希望に満ちている。いまあるくらしのなを手もとに残し、なにを捨てるか、それは住民の自由意志である。同時代にあつてこうした立場にある人たちを、日本のわれわれが知るのは無駄ではない。豊かさの追求を行政や企業にまかせてしまうのではなく、自分たちの手にとり戻してみようではないか。

ユネスコ無形文化遺産一〇周年

展示会でとりあげるのは、マダガスカル国アムルニ・マニア地域圏のアントウエチャ村とアンブヒミトゥンブ村である。いずれも行政村で、多数の集落が含まれる。ここに、ザフィマニリとよばれる人たちが住んでいて、焼畑と水田稲作を営みながらくらししている。マダガスカルの人口約二〇〇〇万に対して、ザフィマニリの人口はわずか数万。民族としてはきわめて小さなグループである。また、彼らが多く居住するふたつの行政村も、一四〇〇近くある行政村に比べればわずかにすぎない。こうした小さな人口や地域をとりあげることは、全世界を対象とすることもあるみんぱくの展示会にあつて、特殊なことだ。

さまざまなかたちでくらしに役立つ木材を伐りだす(撮影・川瀬慈)



手づくりのごさをたくさん使って覆いとした寝台。生後1ヵ月までの乳児を育てるため、母親と乳児が起居する。物理的な保護と、霊的な加護が目的である

何処にでもある 何処にもない世界

ふかざわ ひでお
深澤 秀夫 東京外国語大学教授

マダガスカルに行かれる機会があったら、ぜひしばらく行き交う人たちの顔をウォッチングして欲しい。場所と地方は何処でもかまわない。感心するほどいろいろな顔立ちと出会うはずである。アジア？ アフリカ？ アラブ？ インド？ どの混血？ あ、彼は、彼女は、日本人をつくり！ 経験豊富な旅人は、「そんな光景は世界のどこそこでも見られるさ」と言うかもしれない。しかし、その多様な顔つきの人びとが、お互いに理解可能なひとつのこぼしをしゃべっているとしたらどうだろうか？ そして、そのこぼしが、インドネシアやマレーシアやフィリピンの人びとのことばと同じ仲間だとしたら？ マダガスカルの人びと一人一人の顔には、マダガスカルを舞台に繰り広げられた二十有余年のインド洋の歴史が刻まれているといっても過言ではない。

その一方、今マダガスカルにおいて目に見えるものは、ときとして人を欺く。こんなことが想像できるだろうか？ 草だけが生い茂る丘や山が、かつては緑の森に覆われていたことを。アジアを思い起こさせる各地に広がる水田と稲作の風景も、その多くは一九世紀以降に広まったものであることを。ザフィマニリはじめマダガスカルの人びとの食生活を支えているキャッサバや

マダガスカル北西部の調査村でのスナップ写真



トウモロコシやサツマイモは、一七世紀以降新大陸からもたらされたものであることを。東南アジア各地に見られる、一度埋葬した遺体を掘り出し遺骨だけを墓に納める習慣が、マダガスカルではその多くが二〇世紀以降の「伝統」であることを。今はレンガや土壁造りの中央部地方の家々が、一九世紀以前にはみんなザフィマニリの家屋と同じ木造であったことを。

マダガスカルの人びとの顔のひとつひとつ、生活の一コマコマは、世界の何処かしらで見つか。しかし、その全体はマダガスカルにしかない。そして、わからない事だらけの過去。だから、マダガスカルは面白い！



村を出る葬列

霧の森とは

よしだ あきら 東京情報大学教授
財団法人進化生物学研究所

マダガスカルは自然環境は東西で大きく異なり、それをわかつ障壁が島の中央を南北に走る中央高地である。年間をとおしてインド洋から吹き寄せる貿易風は、この障壁の東側に多量の雨をもたらす。いわゆる熱帯多雨林が発達する。しかしながら、標高差が千数百メートルに達するこの地域の自然環境が、一様であるはずはない。貿易風は、水分の大半を低地に落とす後、立ちほだかる急峻な斜面を吹き上がる。そして中

央高地の東の肩にいたると、気圧と気温の低下に夜間の放射冷却が加わって残りの水分が凝結し、とくに夜半から明け方にかけて日常的に霧が発生する。降水量の多い低地の森を親しみやすく「雨の森」とよぶならば、この細い帯状の地帯にはぐくまれる森は「霧の森」である。

豊かな降水量と高温に恵まれて育つ雨の森は、高さが三〇メートルを超すことが珍しくない。それにくらべて霧の森では木々の生長が遅く、ふつうは高さ三〇メートルを下回る。霧の森は背丈が低い分、高木層、中高木層、低木層などからなる層状構造の間隙が圧縮されたように狭い。また、太陽光線が届きやすいせいか、下層の密度も高い。霧の森にわけ入ると、目を見張るばかりの植物多様性に驚かされるが、それは高い植生密



かつて多用されたパリサンドラは枯渇したが、伝統は代替材で継がれる



ザフィマニリ居住圏の延長にあるラヌマファナ国立公園の豊かな森

度にも一因があるだろう。さらに霧の森の分布域は緯度にして一〇度前後、標高にして八〇メートル前後の幅があり、それらの条件による地域差が少なくない。たとえば距離が五〇キロメートル、標高が二〇メートル違えば、森を構成する植物種の差に気づく。したがって、総体的に見た霧の森の植物多様性は、きわめて高いのである。ところで、ザフィマニリの民の生活圏は標高が高いうえに標高差にも富み、厳しい環境でゆつくり育つ多様な樹種から紫檀の一種パリサンドラ（マメ科）をはじめナトウ（アカテツ科）などの材質の緻密な良質材がえられる環境にある。彼らの伝統的な木の文化は、霧の森がもたらしてくれた恵みを抜きにしては考えることができない。

マレーシアの森の人と マダガスカルの人

うちぼり もとみつ
内堀 基光
放送大学教授



水田を見守る子どもたち



インゲンマメのさやを乾かし
豆を取り出す



インゲンマメ用の焼畑に火を入れる

ボルネオ島（マレーシア・サラワク州）に住む焼畑民イバンとマダガスカル島の焼畑民ザフィマニリの比較をしようと思いついても一五年以上になる。じつのところ比較というよりも対照ということのほうがずっと実感がある。比べる以上、共通の基盤があることは大前提だが、それにしてもいろいろ違いが目立ちすぎるのだ。焼畑民はたいてい二次林を利用して作物を栽培する。原生の森を切り拓くことはごく限られた状況下でしかない。こうしたところはイバンもザフィマニリも同じなのだが、何よりもまず作っているものが違う。イバンの焼畑は陸稲で、彼らは自他ともに認める米の民である。ザフィマニリの焼畑はトウモロコシやらインゲンマメ。ザフィマニリも米を作っているのだが、その導入は比較的新しく、すべて水稲である。昔も今も、これらに加えて湿地でタロイモを栽培する。一人あたりの米飯摂取量が世界一という説もあるマダガスカルにあって、ザフィマニリは今もつて（というべきか）米の民ではない。

それと関係するのかどうか、ザフィマニリの食生活で不思議なのは、どうも山菜を食べないらしいということである。森は集落から遠の

きつつあるけれども、自家用の木材の伐採や他村への訪問のときなど、うっそうとした森のなかを歩くことは多い。これはイバンでも同じなのだが、イバンにとって森は食いの宝庫であって、常に食べる動植物の存在に注意しながら歩く。同行するわたしにもしょっちゅうそれらの採り方や食い方を話してくれた。そのせいで、ザフィマニリと森を歩いているときにも、山径の傍の木や草が可食かどうか訊くようにしていたのだが、「食べられるよ」という答えを聞いたことがない。「食べない」の連発なのだ。竹は屋根を葺くのに重用されているのだから、タケノコだつてたくさん生えているはずなのだが、ザフィマニリの村でタケノコを供されたことはない。イバンはいろんな種類のタケノコを食べるのだが。

アントエチャ村での上映会

川瀬 慈
民博文化資源研究センター

世界各地において、多くの無形文化が消滅の危機に瀕しているなか、映像を活用した無形文化の保全と継承の有効性が指摘されている。わたしは二〇一二年の八月から九月にかけて、マダガスカル中央高地において、ザフィマニリの人びとのものづくりと生業の映像記録をおこなった。ザフィマニリの社会には、近年欧州をはじめとした世界各国からツーリストが押し寄せ、人びとの生活や物質文化の変化が加速している。

ザフィマニリの家づくりを撮影するために、ザフィマニリが多く住むアントエチャ村を訪れた。アントエチャ村の村長宅で、村長の妻（故人）が、伝統的な織機を用いて機織りをおこなう姿を、みんぱくが一九九七年に記録した映像がある。わずか一五年のあいだに、織機も機織りもアントエチャから完全に消え去ったという。撮影の合間に、村長宅で、この映像の上映会をおこなった。パソコンのまわりには、村

長の家族や、近所の住人たちが三〇人ほどが集った（その半数以上が幼い子どもである）。村長は、映像を見ながら、身振り手振りを交えて、機織りの工程や、川岸にあった糸の染色場、亡き妻についてのエピソードなどを語る。おそらくはそれ以外にも土地や、慣習に関する多くの重要な情報のやりとりが世代を超えてあったのではないだろうか。子どもたちは真剣なまなざしで映像をみつめ、村長の言葉に耳を傾け、あれやこれやと、質問を投げかけていた。

小さなパソコンのモニターを使った、わずか数十分の映像上映に対する、まるで劇のなかのような、人びとのさまざまな反応、豊かなやりとりは、強く印象に残った。このような取材映像の現地社会への還元によって生み出される、人びとの声や相互行為のなかにも、無形文化に付随する重要な情報や知識が含まれていないだろうか。それらの声に対して、我々は注意深く耳を傾けていく必要があるのかもしれない。

アントエチャ村で15年前に撮影された映像を観る人びと





アンダマン島民の現在 —スマトラ島沖地震の6年後

いけや かずのぶ
池谷 和信

民博 民族社会研究部

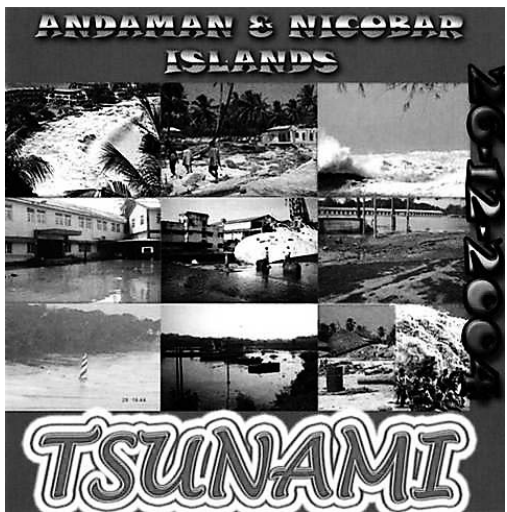
地球上、どこに暮らしていても、他民族・文化の接触はさけられず、国家の干渉からは逃れることはできない。しかし、それらをどの程度、どのように受け入れるか、あるいは拒むかはそれぞれの選択しだいである。インド洋に浮かぶアンダマン島に暮らす狩猟採集民のあいだでも、その現状には違いがあるようだ。

アンダマン島民のその後

インド洋の北東部のアンダマン諸島とニコバル諸島には、多数の島々がある。地理的にはタイ南部のプーケットやミャンマーのヤンゴンに近いが、インド領内に位置する。二〇〇四年二月のスマトラ島沖の大地震で、震源地からわずか一六〇キロメートルというところでもあって津波による甚大な被害を受けた場所でもある。人類学を学んだ人であったら、英国の社会人類学者ラドクリフ・ブラウンの『アンダマン島民』という本を思い出すかもしれない。

わたしは、二〇一一年三月末の一週間、東日本大震災の直後にアンダマン島を訪問する機会があった。「アンダマン島民のその後」に関する資料を収集するためである。これは、震災前に計画していたもので、現地でお世話になった人からは「日本の津波の映像は、(スマトラ島沖地震のときと)まったく同じであったのよ」といわれ、おみやみの言葉をいただいた。

現在、この地域は国防上の理由により外国人の立ち入りを制限しているところが多い。わたしの場合も、州都ポートブレアとその郊外に限定されていて、博物館での展示や収蔵品に関する資料収集が中心になっ



土産物として売られている、津波の映像がおさめられたCD (ポートブレア)

た。州都は、タミール系やベンガル系などインド各地から集まった人びとがおもに居住している活気のある町である。ニコバル諸島からやってきたニコバル農民に会うこともできた。

この地域は、一九世紀から一九四一年まで英国の植民地になっていて、反イギリス的な活動を展開した人びとが大陸から送られる流刑地であった。一九四二年から三年間は、日本によって統治されていた。その後、一九四七年のインドの独立にともないインド領となった。政府は国防上の重要な地域としてみなしており、津波災害の際には、外国からの救援や援助を拒んだ場所である。記録によると、一〇〇年以上には、一〇以上の狩猟採集民が暮らしていたとい

われるが、現在、ジャラワ、センチニールス、オンゲ、グレートアンダマン、そしてショーペンという五つの異なる集団が存在しているにすぎない。なかでもグレートアンダマンは、最近、最後の話者が亡くなったというように、絶滅に瀕する集団になっている。

民族間の現状の違い

今回、現地での滞在をとおしてもっとも驚いた点は、島のなかに現代文明との接触のほとんどない狩猟採集民の人びとが暮らしているという事実である。経済成長の進むインドのなかで、こういう場所があるのが不思議な気がした。しかも、島の海岸部では行政との接触はあるが政府が彼らの生活に干渉せずに丸ごと保護してきたのだ。



車に近づくジャラワの男性

彼らの状況は、政府の政策に強く抵抗してきたことに由来するというのが、その真偽はよくわからない。

ジャラワの人びとは、州都に近い森に暮らし道路沿いで観光客に接することがときにはみられる。しかし、その暮らしはベールに包まれており、津波の際どうであったのかは不明である。オンゲの人びとは、津波時に海岸から内陸に逃げてほとんど死者は出ていないという。海岸の家屋は流されたが、その後、医療援助程度をおこなう行政の避難所に移動したあとに森のなかに自らのキャンプを自力で建設したという。狩猟採集は、常に維持されているわけだ。

ニコバル農民の場合は、そうはいかなかった。ある島では、島の沿岸部に暮らしていたので、すべての村が破壊されて、多数の死者も発生した。しかも、この震災でおよそ三万八千頭の豚が地域全体で死亡したというのだ。わたしの訪問時には、ツナミ・メモリアルパークや高台には新しい村がすでに創られていて、復興計画は順調に進んでいるようにみえた。

狩猟採集民の環境史へ

わたしは、これまで狩猟採集民を中心にすえた地球の環

境史に関心を持つてきたが、彼らは平素から政府に関与してこなかったこともあって、災害への対応に関する情報が文字記録として残されることはほとんどなかった。彼らの先祖は、先史時代にマレー半島からこれらの島に移住して、英国植民地になる以前からこれらの島に暮らしてきた。その一方で、ニコバル農民の方は、今回の地震で大きな被害を受け災害後に住宅が提供されて政府の恩恵を受けることになった。

アンダマン諸島に暮らす狩猟採集民のなかでも、母語が失われつつあり集団の存続が危ぶまれる人びともいれば、狩猟採集を現在においても維持してきた人びとがいる。どうして、このような違いが生まれるのだろうか。災害といった環境変化と彼らのかわりの歴史を、どのように捉えたらよいのだろうか。二〇一二年から始まった民博・共同研究会の場で考えていきたいと思っ

共同研究
「熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的
研究—アジア・アフリカ・南アメリカ
力の比較から」
代表：池谷和信
2012年10月～2015年3月
http://www.minpaku.ac.jp/research/
activity/project/iurp/121149

日本の文化展示「祭り」と芸能」「日々
のくらし」が新しくオープン
本館展示場「日本の文化」展示の一部
が3月22日（金）に新しく生まれ変わ
ります。お楽しみに！



ザフィマニリの村を望む

◆ワークショップ
「ザフィマニリの家壁文様を彫ろう」
ザフィマニリの木造家屋の家壁には無数の平
行線が彫られています。展示場に用意した木
材に文様を彫ります。会期中に大きな
家壁をつくりあげよう。
※毎日開催、当日受付、参加無料
「ザフィマニリの文様を編もう」
ザフィマニリでつくられるカゴや帽子、敷物
には、いろいろな文様が編まれています。とて
も難しそうだけど、実は簡単な作業の繰り返し。
返し。きれいな文様を編むことができるか
な？
※毎日開催、当日受付、参加無料

特別展
「マダガスカル 霧の森のくらし」

マダガスカル島の東に広がる熱帯雨林から、山
をのぼって標高1000メートルあり。そ
こにある霧の森では、人ひとが森に寄りそっ
てくらしています。釘を使わず建てられ、幾
何学的な意匠が刻まれた木造家屋、なんの
変哲もない静かなくらしに伝わる、霧の森の
ものづくりをご覧ください。
会期 3月14日（木）～6月11日（火）
会場 特別展示館1階

■関連イベント
ワークショップとミニレクチャーは特別
展示館で開催のため、展示観覧料が必要
です。

「ザフィマニリの敷物を編もう」
みんながザフィマニリの敷物をつくる。マ
ダガスカルから持ち帰った草をたいて平ら
にして、敷物を編むことができるよ。作業の
間には、みんなの研究者によるザフィマニ
リに関するおはなしの時間もあります。
3月17日（日）、4月1日（月）、15日（月）、
5月3日（金・祝）、20日（月）、31日（金）、
6月11日（火）
時間 14時～16時30分
（おはなしの時間15時～15時30分）
※当日受付、参加無料

みんぱくはせみナール

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時（13時開場）
定員 450名（当日先着順）
参加費 無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です）
第418回 3月16日（土）
「春のみんぱくオラム2013」関連
家族の今—イタリアの事例から考える
講師 宇田川妙子（国立民族学博物館准教授）



現在、先進国ではどこ
でも少子化と高齢化の
問題が深刻化し、様々
なレベルで家族関係を
考え直すとする機運
が高まっています。よ
かでも日本の状況とよ
く似ているイタリアの
家族事情を紹介しなが
ら、家族のこれからの
考えます。

第419回 4月20日（土）
【特別展関連】
マダガスカル 霧の森のものづくり
講師 飯田卓（国立民族学博物館 准教授）



身近な森から伐りだした木の家、その窓にほごす
幾何学的な木彫り、植物繊維から編みだされるさま
ざまな意匠。マダガス
カル山間部のくらしに
息づいてきたものづく
りは、こんにち国際的
な評価を受けるようにな
りました。次世代に
受け継ぐべきものは何
か、われわれができる
支援は何かを考えます。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893（平日9時～17時） FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/ e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会（大阪）

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名（当日先着順、会員登録必須）
第418回 4月6日（土）14時～15時
特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」関連
マダガスカル中央高地のザフィマニリ文化
講師 飯田卓（国立民族学博物館 准教授）
アフリカ地域にありながら、東南アジアからの文化的影
響も受けてきたマダガスカル島。そう聞くとエキゾチック
な一面もあります。霧の森にくらすザフィマニリの人び
とを紹介いたします。
第419回 5月4日（土）14時～15時
マケドニアの陶器と食文化
講師 ゴルダン・ニコロフ（民博外国人研究員）
マケドニアの伝統的な陶器作りについて映像を用いて紹
介します。とくに結婚式と墓参りで用いられる二つの儀
礼用の酒壺については実物もお見せしながら解説します
（通訳あり）
※講演会終了後にはゴルダンさんお手製のマケドニア料
理を味わいます。

東京講演会

会場 JICA市ヶ谷ビル セミナールーム600
定員 80名（要申込）
第105回 3月30日（土）14時～16時
特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」関連
何処にでもある何処にもない世界 マダガスカル
講師 深澤秀夫（東京外国語大学 教授）
飯田卓（国立民族学博物館 准教授）
マダガスカルにはインド洋を行き交ったアジア、アフリカ
アラブ、ヨーロッパの人ひとの千年余りの「記憶」が随
所に刻まれています。言葉や生活文化を丁寧によみとく
ことで、文献には記されていないその歴史にせまります。

◆ミニレクチャー
ザフィマニリの村を訪れて展示をつくったみ
んぱく研究者が、ザフィマニリのくらしや手
しごとについてお話しします。
※毎週月曜日開催（予定）、自由参加
参加無料
◆みんぱくセミナー
左のページをご覧ください。
◆みんぱくウィークエンド・サロン
詳細は本誌24ページをご覧ください。

「やっぱヨーロッパ—春のみんぱく
フォーラム2013」
◆みんぱく映画会
「人生、ここにあり！」
日時 3月23日（土） 13時30分～16時30分
（開場13時）
会場 講堂（先着450名）
※申込不要、参加無料
お問い合わせ先
広報企画室企画連携係
電話 06・6878・8210

国際シンポジウム
Exhibiting Cultures: Comparative
Perspectives from Japan and Europe
（文化を展示すること）
—日本とヨーロッパの遠近法を考える—
日時 3月17日（日） 10時～17時
会場 第4セミナー室
※要申込、参加無料、同時通訳あり

みんぱく公開講演会
「なんだ？日本の文化って
——芸能からMANGAまで」
今回の講演会では、沖縄と日本本土の民俗文
化が複雑に交わる奄美の芸能・音楽と、香港
と台湾における日本の大衆文化（漫画など）
の受容を題材にして、日本文化の境界やダイ
ナミズムを問い直す講演をおこないます。

日時 3月22日（金） 18時30分～20時45分
（17時30分開場）
会場 オールホール（大阪市北区梅田
毎日新聞社ビル地下1階）
定員 480名
※手話通訳あり
※要申込、参加無料
お問い合わせ先
研究協力課 研究協力係
電話 06・6878・8209

国際シンポジウム
「博物館は悲惨な記憶をどう展示するか」
日時 3月24日（日） 9時30分～18時
会場 第4セミナー室
※申込不要、参加無料、同時通訳あり

◆無料観覧日のお知らせ
3月10日（日）は万博公園ふれあいの日のた
め本館展示および特別展を無料で観覧いた
だけます。
※イベントや刊行物について、くわしくはホーム
ページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から
17時（土日祝を除く）です。

国立民族学博物館
ミュージアム・
ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

メイド・イン・マダガスカルの商品

特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」にあわせて、
現地から取り寄せた商品をご紹介します。
まずはチョコレート。原料の生産やカカオバターの製造、
生産までが国内でおこなわれています。このこだわりは、
70年の歴史をもつ老舗チョコレート屋さんによるもの。
マダガスカルカカオの深い味わいをご賞味ください。
次は、カメレオンやバオバブなど、現地の人びとと手製
の動植物の人形です。これらはラフィア椰子の葉を加工
したもので、とてもカラフルに彩色され、愛嬌がありま
す。ラフィアは防水性もあり丈夫で、使い込むうちに艶
がでてきます。その性質をいかしたバッグやカゴ類もご
用意しています。
会期中は、特別展示館内にもショップがオープンします。
かわいらしいスタンプや、特別展解説書、オリジナル
グッズ（来月ご紹介予定）なども取り揃えていますので、
ぜひ足をお運びください。



ラフィアバオバブ (SS)	630円
ラフィアキリン (SS)	945円
ラフィアカメレオン (小)	1,050円
(大)	1,575円
キャラクタースタンプ	1,260円
チョコレート(5種)	578～630円

価格はすべて税込

大草原の小さな博物館

—カザフスタンにおける博物館活動と教育活動をつなぐ試み

藤本透子

民博民族文化研究部

地球
ミュージアム
紀行

中央アジアのカザフスタンでは、街にも村にもたくさんの博物館がある。博物館といっても、国立の立派な建物から、日干し煉瓦を積み上げて作った小さな建物、学校のなかの一部屋だけなど、その規模や性格はさまざまである。小さい博物館であればあるほどその地域の人たちの意思が反映され、地域史の掘り起こしや教育活動としての性格をもつ場合が少なくない。ここにとりあげるカヌシ・サトバエフ博物館は、カザフスタン独立前後の歴史の見直しのおかげで誕生した、とても小さな博物館である。

学校のなかの博物館

カザフスタン第四の都市カラガンダから、見渡す限りの草原を突っ切るでこぼこのアスファルトの一本道を、バスに揺られること五時間。ぼつんとした白っぽい点々が、だんだんに大きくなってやがて村としての姿をあらわす。人口七〇〇人あまりのウントウマク村の中央にある一番立派な建物が一二年制の学校で、その二室が博物館となっている。女性の副校長の案内でなかに足を踏み入れると床にはベージュの絨毯がしかれ、壁面には濃い緑色のパネルが組まれて、写真資料や模型、衣類などが展示された落ち着いた空間が広がる。ここには、カヌシ・サトバエフ（一八九九—一九六四）の生涯と地域史が重ねあわされて展示されている。

カヌシ・サトバエフとは誰か？ カザフ人であれば、彼を知らない人はいないだろう。カヌシはこの村周辺のカザフ遊牧民の冬営地に生まれ、ソビエト時代にカザフスタンの学術活動を総括していた科学アカデミーの初代総裁となった地質学者である。天然資源の豊富なカザフスタンで、学術活動に携わるのみならず鉱物採掘や運河開設に大きな役割を果たした。ペレストロイカによって歴史の見直しと民族文化の再評価が進むなか、一九八九年に彼の生誕九〇年祭がおこなわれ、学校はカヌシ・サトバエフ学校と改称して博物館が併設されたのである。

村の歴史の光と影を学ぶ

博物館の開設にあたっては学校教師が中心となり、カヌシの親族や隣人であった村の古老や、カザフスタン各地に暮らす子孫や同僚や友人たちを訪ね、聞き取りと資料収集をおこなった。この活動は、カヌシの生涯を明らかにするだけでなく、ソビエト時代に語ることのできなかつた史実を含めて二〇世紀初頭からの地域史をひもとくという目的をもっていた。

この活動の結果として開設された博物館の入口には、一九〇三年に裕福なカザフ人一族がロシア帝国の認可をえて開校した木造校舎の模型が置かれている。カヌシもこの学校に学んだというが、ソビエト時代初期に富裕層が「民衆の敵」として追放されると校舎は取り壊され、あらたに学校が設立されて識字教育や社会主義イデオロギーの啓蒙の拠点となった。一九三〇年代のスターリンの大粛清の際には、知識人であったカヌシの叔父が連れ去られ行方不明となったことも写真とともに解説されている。カヌシの生涯をとおして、この村のカザフ人たちの歴史の光と影が映し出される。

博物館は大人が見学するだけでなく、教育活動の場でもある。カヌシのとても大きなサイズのスーツやネクタイ、シャツ、毛皮で縁どりされた帽子などが展示され、子どもたちがカヌシを身近に感じられる工夫がなされている。ウマの鞍やサモワール、研究対象であった鉱石などもある。「カヌシ学」という授業が学校ではおこなわれ、「カヌシ学会議」という生徒による「コンクール」も開催される。学校教師とともに子どもたちが調べた内容は、学校のなかの博物館展示に徐々に反映されていく。

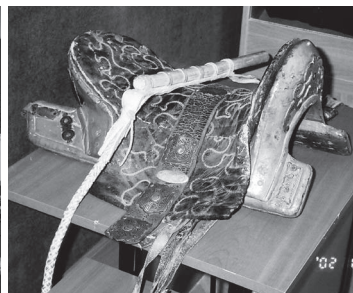
このように、学校内に博物館が設けられ、地域出身の学者や著名人をおして地域の歴史や社会・文化、さらに科学についても学ぶ授業がおこなわれるのは、この村に限ったことではない。博物館を開設し充実させていく活動は、地域の教育活動と密接に結びついている。

眼を転じれば、カザフスタン国立博物館やロシア民族学博物館などには、一九世紀の見事な民族衣装や贅を尽くした装飾品などが展示されている。草原の村の小さな博物館は、これといって高価な資料があるわけではないが、村人たち自身が地域史を再考し子どもたちへ引き継ぐとする活動の場なのである。



学校の授業風景

※写真はすべてバヴロダル州バヤナウル地区ウントウマク村にて撮影



カヌシが友人に贈ったウマの鞍の展示。上に鞭（むち）が置かれている



博物館に展示されたカヌシにちなむシャツ



村の学校



中村俊亀智 民博名誉教授を偲ぶ

二〇一二年一月二日ご逝去 享年八十一歳

近藤 雅樹 民博民族文化研究部

中村俊亀智というよりは「中村たかを」といったほうが広くその名を知られているのかもしれない。民具の研究や調査の際に参考とされた一冊の本があった。『現代のエスプリ 民具』（至文堂、一九七四年）である。その編集を担当し、解説されたのが民博の「中村たかを」氏だった。民博の礎でもあるアチックミュージアムの伝統を受け継いで民具というものの説明をし、かつて日本人がどのような物質文化を身につけていたかということを知りやすく解かれている。伝統的な民具研究の入門書としてその価値は高い。

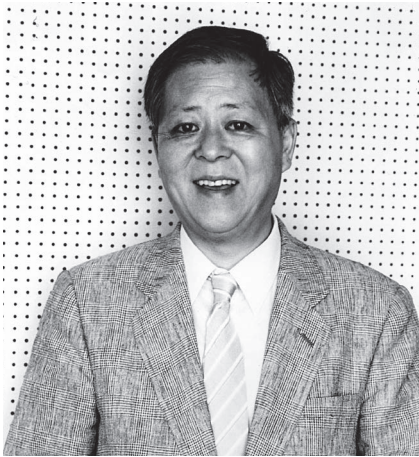
じつは、わたしは中村氏が去られたあと民具研究（担当）のために民博にやってきた。しかし、中村氏との面識はない。ひよっとすると現在の民具研究者の多くも、ほとんど面識はなかったのではないか。

中村氏の民具研究では、学史を整理した業績とともに竹細工の研究が印象に残っている。民博を退官される直前には、労働者の研究もあり、これは大部の調査報告書として刊行された。し

かし、民博を去られてからの中村氏の関心は急速に民具研究から離れていってしまったようである。その後、民具に関する寸評や資料紹介などもなさろうとしなかったためか、民具研究者のあいだでも若い人たちにとっては伝説めいた存在に映るかもしれない。

保谷（西東京市）にあった財団法人民族学協会附属民族学博物館に移転されたアチックミュージアムの民具資料コレクションとその後、昭和三十七年にこの博物館の閉鎖により、国に寄贈されて戸越（品川区）の文部省史料館に移された。

高校生だった当時から、中村氏は保谷の博物館で資料整理のアルバイトをしていたという。その後、都立大学大学院社会科学研究所を修了すると、昭和三年に財団法人民族学協会研究員となり、博物館に戻ってきた。そして、約五年間の勤務を経て民族学協会を退職すると翌日からは文部事務官として史料館に奉職された。やがて、このコレクションは国立民族学博物館が所蔵するところとなり、昭和四八年から



中村俊亀智名誉教授
（『月刊みんぱく』1987年9月号より）

祖父江孝男 民博名誉教授を偲ぶ

二〇一二年二月二十五日ご逝去 享年八十六歳

中牧 弘充 吹田市立博物館長

祖父江孝男先生の訃報を知ったのは暮れの小雪交じりの北京だった。ちくま文庫版の『県民性の人間学』（二〇一二年）が上梓されて間もなくのことで、その急逝に驚いた。八六歳になお健筆をふるわれていたからである。

祖父江先生は一般には県民性の研究で知られ文化人類学の入門書にも定評があった。アメリカに留学中、当時一世を風靡していた「文化とパーソナリティ」の理論を咀嚼し、それを日本社会に適用したバイオニアでもあった。またアラスカ・エスキモーの研究に先鞭をつけたことでも功績がある。

新潮文庫版の『県民性の人間学』（二〇〇〇年）の表紙には「文化人類学の泰斗」という形容が肩書についている。明治大学で岡正雄、蒲生正男らとともに後進を育て、国立民族学博物館に転じてからはその創設に尽力し、梅棹忠夫初代館長の片腕として大車輪の活躍をした。とくに研究部会議での議長役は見事だった。また日本民族学会の会長を二回もつとめるなど、まさに泰斗にふさわしい存在であった。

民博では一〇年にわたる特別研究「現代日本文化における伝統と変容」の初代担当部長として、また一九八四年に放送大学に移られてから

は討論参加者として、つねに議論に加わっていた。梅棹館長は別格として、米山俊直先生とともに東西の重鎮の役割をはたしていたといえる。わたしが実行委員長るとき、現代の「神話」をテーマに取り上げたいと言ったら、東京からの電話でその成否を親身になって心配してくれた。民博の展示では、アメリカと東アジアが常設展示の担当であり、「朝鮮半島の文化」におちついた名称をめぐって頭を悩ましていた。また外国語表記をめぐることは、梅棹館長と異なる意見を持ち、論陣を張った。簡単に言えば、梅棹館長が英語は国際共通語ではないと原理原則に立脚したのに対し、祖父江部長は英語のはたす実質的機能を重視していた。そして、梅棹館長時代にはその原理がならぬかれ、ポスト梅棹時代になると次第に英語の機能が増していった。

先生の「人間性」にも言及しておきたい。生まれは東京下町であるが、吉原に近い浅草出身だったため、山の手や県外の同級生たちから蔑視されるという苦い経験をもつ。それが文化のちがいに目覚めるきっかけとなり、文化人類学への道につながった。ただし、下町特有のべらんめえ口調は聞いたことがなく、洗練された庶民性を身につけておられた。一九九三年に紫綬

褒章を授与されたとき、民博関係者による祝賀会がひらかれた。挨拶に立った先生は受章式用にモーニングを調達したまではよかったが、サスペンダーがなくて困ったと、あわてぶりの顛末を飾り気なく面白おかしく語っておられた。開館当初おこなわれた研究部事務の女性職員による人気投票では、先生がトップだったそうである。ささの祝賀会ときも「昔と変わらず若々しくダンディな祖父江先生」（私信）と慕われていた。いつまでもダンディのまま、安らかにお眠りください。



梅棹忠夫民博初代館長（右）と談笑する
祖父江孝男名誉教授（左）

お金のためだけに、絆のなかで働くこと

奥谷京子

WWBジャパン代表

被災者の経済的自立を促すには、アイデアが必要だ。商品の購入予約の形で代金を先に集め、仕事を創る。こうして生産者と消費者の絆を育みながら、震災の復興支援に取り組むWWBジャパンの活動を紹介します。

3・11で女性起業家のネットワークが動く

東日本大震災が起きた日、わたしは東京の事務所にいた。震源地を知って思い浮かんだのが、ここ数年來のお付き合いがあった岩手県九戸郡洋野町の庭静子さん。ウニやホヤなどを使ったレストランを経営していた。船や車ともにお店も津波に流され、地獄絵巻のようだった、と電話で知った。急いで仲間と直接救援のトラックを出して、燃料などを提供した。

がれき撤去に疲れた彼女が嘆いたのは、自分のことよりも従業員の将来だった。「何もしないで毎日過ごすことがいかに辛い。働く場があれば移住する必要もない」。そこでわたしはすぐに「いつでも送ってね便（庭さんの商品の購入予約）」を全国に呼びかけた。わずか五日で二〇〇万円（一口五万円）が集まり、そのお金で庭さんは加工場を再建した。数年かけて五万円の商品を作って送り続ける、そうすれば販路も確保され、仕事ができるのだ。こ

れには全国の女性起業家も協力して下さっており、「顔が見える応援がなかった。商品はいつまでも待つ」とエールをくれた。お金以上に、それが庭さんの励みになる。

ソーシャルネットワークプロジェクト始動！

WWBジャパンは、女性の経済的な自立を支援する団体 Women's World Banking の日本支部として一九九〇年に発足した。経済活動を始める際に誰もが直面する法・資金・教育面での問題解決を目指して起業セミナーを開催し、一〇〇〇人余の起業家を輩出してきた。震災の復興支援でも、これまで築いたネットワークを活用し、「いざというとき役に立つ」活動を心がけている。

庭さんの購入予約がひと段落し、次に設備投資にお金をかけずに、避難所や仮設住宅など場所を選ばずに女性たちの能力を引き出すことが何かできないかを考え始めた。そこで思い出したのは、

誇りに思える仕事を創る

震災から一年経った昨年、だんだんと震災の話題もニュースで取り上げられなくなり、事業としてどう継続するかが課題となった。まず宮古を訪れて自分たちのオリジナル商品を創り、自らが全国へ赴いて被災の経験を語りながら販売することを提案した。このような提案をすると、多くの場合地方の人たちは拒むのだが、宮古の女性たちは違う。何をやるにも前向きだ。「皆さんにこれだけお世話になったのだから自立しよう！」と意見がまとまった。これまでに東京以外にも金沢、京都、兵庫の西宮を訪問し、今後も九州へと生の声を届けに行く予定だ。この行動力で大手企業からの商品づくりの依頼を受けたり、さらに彼女らの商品はフランスにも飛んだ。仲間では仕事を受注・分配できるようにと事業協同組合設立の準備も始まっている。

手仕事はその人を不思議なくらい夢中にさせ、完成したときに喜びを与えてくれる。購入者からの感謝の気持ちがさらにやる気をおこさせる。こうした循環のなかで、絆が働く意欲を支えていく。頭を使って手を動かす、これこそ働くことの本来の意味ではないだろうか。自分が前向きに生きるために働くのだと彼女たちはわたしに教えてくれる。経済が不安定ななか、組織にぶら下がらず、自分で手を動かして稼ぐ力をもっている人はたくましい。被災地で一人ひとりが喜びをもって自立しようとする仕組みは、依存型になってしまった日本を再生する先駆けモデルになるとわたしは確信している。

幼いころに目にした、編み物をしている祖母の姿だ。毛糸を大事にして、何度も編み解きながら新しいものに作り変える。編み物は究極のリサイクルであり、材料さえあればいつでもでも始められる。さらにわたしたちのセミナーを卒業したニットデザイナー三園麻絵さんの協力もえることができた。編み物を通じた仕事・生きがい創り、「ソーシャルネットワークプロジェクト」の始まりである。

二〇一一年六月、これから暑くなるという時期に、全国に毛糸の提供を呼びかけた。わたしたちの姉妹団体、日本のフェアトレードの先駆者「第3世界ショップ」には全国に取引先のお店が六〇〇店以上ある。これらのお店がさらにお客様にも声をかけて、たくさん毛糸や道具を提供して下さった。それらの糸で配色・デザインなどをWWBジャパンとデザイナーが準備し、福島のお津若松市、岩手の宮古市、岩泉町、大槌町、青森県青森市（福島から避難している人びと）の約六〇〇人の編み手へ提供した。材料の毛糸は無料で集まり、今でも提供したいという全国からの善意の連絡が絶えない。また商品を買う人を募集したところ一五〇人以上から一口三万円の申込があった。それが仕事創りになり、それぞれの地域で、編み物サークルができた。これまでまったく知らなかった人同士も、年齢に関係なく、何でも話し合える仲間になる。仮設住宅では遠慮がちでもここでは編み棒を片手におしゃべりし、いつも笑いが絶えない。さらに岩手で編み方をマスターした人たちが青森に赴いて教えるなど、編み手同士で技術を高め合う関係へと発展している。



宮古のオリジナル販売商品



2011年6月下旬、会津若松で初めて編み物講習会を開催



2011年7月半ば、岩手県宮古市の避難所を訪問



2010年3月、震災前の庭さんのお店



津波で流された庭さんのレストラン

ネコを食う

もりやま たくみ
森山 工

民博 特別客員教授・東京大学大学院教授

「野蛮」なる慣行？

アフリカ大陸南東の沖合、インド洋上に位置するマダガスカル島。一九世紀末、その中央高地の北東部でキリスト教の布教に従事していたあるイギリス人宣教師は、驚きとともに次のような報告を残している。

「この地域の人びとはネコを食べる」

愛玩動物としての家ネコを思い浮かべるなら、確かにシヨッキンガか。猫食という慣行は、時代と地域により広範な分布を見せるものだが、犬食とならんでタブー視され、不可視化される傾向にある。それは猫食を「野蛮」と断ずる傾向とも重なる。宣教師の驚きにも、「野蛮」への恐れがこめられていたのであろう。だが、「野蛮」と決めつけることは妥当なのか。以下をご覧ください。

捕まえた「盗人」

「今日の昼のおかずはネコだよ」
件の宣教師がいたのと同じ地域でのことである。ある朝、よく訪問しているネコを、捕まえたのだそう。

猫食とはいえ、マダガスカルの家ネコは外来起源である。わたしの調査時でも、この地域ではネコを飼うという習慣そのものがなかった。また、食用にネコを飼育するという



直火であぶって毛を除去する

習慣もなかった。わたし自身が猫食を経験したのも、このときだけである。彼らが食べるのは、野生ネコなのである。マダガスカルで野生ネコには「盗人」のイメージがつきまわっている。人を野生ネコにたとえると、その人が徘徊しながら他人のものを掠めとっているという意味になる。だから、この家人がニワトリに手を出しているネコを捕まえたというのは、そのイメージと符合したのである。

たまさかのご馳走

ネコを殺し、毛を炙って除き、解体し、調理し、という一連の過程で、この一家（一〇代から二〇代にかけて、男女の子どもが九人いた）は終始興奮に包まれていた。ネコを食すのが、この人たちにとって非日常であったことがわかる。盗人には肝が七つある、などという言い伝えをもちだして、ネコを解体しながら内臓を数え、わたしの目にはかなり恣意的とみえる数え方で、ともかくも数が七つに一致したときの、彼ら彼女らの感きわまつたようす。

そもそもネコが常食だったわけではないのだ。野生ネコを捕まえたときの、たまさかのご馳走だったのであろう。煮込みとなって昼食に供されたその肉は、ウサギに似た味と食感で、些かの野生味を感じさせた。まことに食文化は、地域によって多様である。

みまばく 私の逸品 ザファイマニリの女性用帽子

草がもつ独特の香ばしい匂い。きゅっと引きしまった編み目。この帽子はマダガスカル東部の高地に居住するザファイマニリの女性用帽子で、現地でトウングレレイチャとよばれている。ザファイマニリの人びとは、マダガスカル中央高地縁辺の標高一〇〇〇〜一六〇〇メートルの湿潤な地域に居住している。女性たちは、多種類のパピルスやヨシの草を砧で打つか、小刀で裂いて平らにして編みの材料とする。編みの使用目的に応じて、太さや堅さ、柔軟性を考慮して、材としてつかうものを選び、帽子や敷物、カゴ腰袋、塩入れ、衣類入れ、小物入れなどさまざまなものをつくりあげている。

編み技術は、この帽子からみてとれるように、太さの均質な編み材を上下に押し合いながら、一定の交差を繰り返す組み編みである。基本的には、二本飛び、二本すくいで編みすすむ手法で、この編み文様を日本では網代とよぶ。編み目がつまっているため丈夫であり、タテ芯とヨコ芯との交差数によってさまざまな文様を表現することが可能である。

そのため、ザファイマニリの女性たちは、基本の編み文様を變形させて、多彩な文様をつくりだしている。この帽子では、化学染料で染めた材を、効果的に取り入れている。また、交差数を巧みに変えることで、「ことわざや聖書の句などを編みあげることができる。本品には「AZKVI·FAMAHARZA」と編み出されていた。収集者の専門家は「AZKVI·FAMAHARZA」の母音の一部を省略しているという。「くよくよするながんばれ」とのこと。まるで暗号のように、帽子の側面という限られた空間に描き出されている。ザファイマニリの女性たちの創意に心躍る逸品である。



立体的に編みあげた髪型と帽子の文様表現の対比が印象的なザファイマニリ女性

標本番号 H0267993
地域 マダガスカル共和国
受入年 2009年
特別展「マダガスカル
霧の森のくらし」にて展示

民博 文化資源研究センター

うえば
ようこ
上羽陽子

タンザニアのハニー・コレクター

やつかはるな
八塚 春名

民博 外来研究員
日本学術振興会特別研究員



煙でいぶしてハチを追い出しミツをいただく



甘くてキツイハチミツ酒



樹上に設置された養蜂筒



土中から掘り出したハリナシバチの巣



使い込んだ養蜂筒を花嫁の実家へ運ぶ

村のもてなし

タンザニアのど真んなか、乾燥した埃っぽい地域と称されるドドマ州に、サンダウエという人びとがいる。わたしは二〇〇三年以来、サンダウエが自然環境をどのように利用しながら生活しているのか調査を続けてきた。彼らは一五〇年ほど前までは狩猟採集を基盤として生活してきたと考えられてきたが、じつはこの地域では昔から、狩猟採集民としてよりもむしろ、ハニー・コレクター（ハチミツ採集者）として名を馳せていたらしい。そんな彼らご自慢の、ハチミツにまつわる話を紹介しよう。

ハチミツは、ハチが蜜を集める花が咲き終わった時期が採集期となり、この地域では二月四〜六月、一〇月と一年に三回、それぞれ異なる花のハチミツが採集できる。そのころには、訪問先の家々で、ボールになみなみと入ったハチミツとスプーンを手渡される。これは最上級のもてなしだ。しかし、スプーンを使い、まるでスープのようにハチミツを食べることに慣れないわたしは、ありがたいやら、苦しいやら、

いつも苦笑い。結局、食べきれずに降参してしまう。ハチミツは、夕食のおかずとして登場することもあれば、ハチミツ酒となって人びとの宴の主役になることもある。

村でハチミツをえる方法には二通りある。ひとつは、男性が丸太をくり抜いて作った養蜂筒を樹上に設置し、そこに棲みこんだミツバチは、新品のものは使えない。何度か使い込み、ハチが巣をつくることを確認した、年期の入った養蜂筒こそがいいとされる。

ハチミツと世界経済

蜜をとる養蜂で、もうひとつは、樹洞や地中に巣をつくるミツバチやハリナシバチの蜜を採集する方法だ。一度に大量に採れるのは前者の蜜だが、地中に巣をつくるハリナシバチの蜜は絶品だ。ハリナシバチの蜜を食べるとしばしば腹を壊すが、このハチミツは、腹のなかの汚いものを体外に排出する葉の役割も担っているとサンダウエは考えている。

婚資は養蜂筒

こんなサンダウエ社会には、養蜂をめぐるユニークな習慣がある。男女が結婚する際に、男性側は女性側へ婚資として家畜や現金を支払うのだが、それらに加えてハチミツ採集のための養蜂筒を最低ふたつ、両家の伝言役を務めてくれた人へ支払わなければいけない。婚資の内容は、社会によって、また、時代に応じて変化する。家畜や現金を支払う習慣はアフリカの多くの社会でみられるものの、養蜂筒を支払うという例は非常に珍しい。

養蜂筒の形や材質、設置方法もまた、地域によってさまざまだ。婚資として利用するサンダウエは、すぐに壊れるようないかげんな養蜂筒は決して作らない。材にこだわり、硬く、重い樹種を選択する。選んだ丸太を縦ふたつに割り、内側をくり抜く。そしてふたつを上下に合わせて両端をくり、樹上に横長に設置する。あとはハチを待つのみだが、婚資に支払う場合



養蜂筒をつくる少年

こんなふうに、ハチミツとゆかりの深いサンダウエだが、彼らのハチミツが町まで売られていくことはほとんどない。タンザニアでは、西部のタボラ州がハチミツの一大生産地として有名で、国内どここの市場に行ってもタボラ産のハチミツが並んでいる。自然条件に大きく左右されるハチミツを、安定して大量に生産することは難しいが、タボラ州には、優良な蜜源となるマメ科樹木の林が広がっている。また養蜂は、ハチが棲んでくれるように筒を管理する人の努力も重要だ。タンザニアでは、自然条件と人の労働力の両方がそろったタボラ産のハチミツが、ハチミツ市場の圧倒的シェアを占めているのだ。最近では、中国企業がタンザニアにハチミツ工場をつくり始めた。タンザニア各地に養蜂箱を設置し、オーガニック・ハニーとして欧米へ売り出すという。サンダウエが暮らすドドマ州も、どうやら養蜂箱の設置地域として選定されているようだ。タンザニアのハチミツが世界中の私たちの食卓をにぎわすことは、とてもうれしい。ただ、中国企業がどのようにこの事業を展開していくのか、現地のローカルな養蜂と生産段階でどうすみわけるのか、注目していきたい。

3月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14時30分から15時30分

■ 展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どンドン質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

3日
(日)

話者：河合洋尚（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：客家建築の世界
会場：本館展示場内ナビひろば

17日
(日)

話者：呉屋淳子（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：学校教育の中の八重山芸能
会場：本館展示場内ナビひろば

24日
(日)

話者：川瀬慈（国立民族学博物館 助教）
話題：エチオピア、音楽職能の世界
会場：本館展示場内ナビひろば

31日
(日)

話者：太田心平（国立民族学博物館 助教）
話題：韓国人主婦がカナダ生活で困るモノ
——外からみた韓国物質文化
会場：東南アジア休憩所

1年間みんなくに何度でも入館できる「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
 - ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
 - ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。
- 詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

今年1月から本誌インフォメーションのページでも紹介している「やっぱりヨーロッパ」関連のイベントが続いている。自分もかかっているが、ウィークエンド・サロン、関連映画上演会、みんなくゼミナール、ハンセミナー、いずれも冬場にもかかわらず、大変盛況なようだ。アジア、アフリカ関連の行事が多いなか、ヨーロッパファンの渴望が影響したのか、特段大がかりなイベントでもない分、うれしいわりには少し複雑な心境だ。かといって普段、ポスターやチラシに結構な宣伝費をつかっても、必ずしも入場者数に反映しないのがなやましくもある。広報誌である『月刊みんなく』も、イベントや展示には関連特集を組み、利用しやすいように必要な情報を提供するよう努めている。読者のみなさまにはどれだけ役にたっているかぜひ知りたいところだ。4月から『月刊みんなく』は編集体制がかわり、紙面でもあらたな企画の準備をすすめている。独りよがりでない、読者のニーズにこたえられる『月刊みんなく』を目指したい。

(庄司博史)

●表紙：イス 標本番号：H0267964 地域：マダガスカル共和国 民族：ザフィマニリ

次号の予告

特集

だまし、だまされ

月刊みんなく 2013年3月号

第37巻第3号通巻第426号 2013年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂
編集委員 庄司博史（編集長） 小川さやか 樫永真佐夫 久保正敏 菅瀬晶子 山中由里子
編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一孝
制作・協力 財団法人千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

